

月の欠片

サウジ東部のアルコバールはひとときわ熱い。

ジエツダもそうだが海沿いの街は湿度が高いので六月ともなれば熱くて蒸し暑い最悪の状態だ。

水が豊富になった今は家々や公園にブーゲンビリアや夾竹桃が鮮やかに咲いているが、容赦無い突き刺すような日差しを受けていかにも辛そうだ。

夏も涼しい高原の町・アルバハからやってきたカリムにはなおさら堪えられない。夜になると日中よりは温度は低くなるが湿度は増して何をしていたなくとも額にはじっとりと汗が滲み出てくる。

「統領、お辛そうですね。クーラーをお使いになったらいかがですか。宜しければ、お付けしましょうか」

侍従のマスードは言ってみだが、カリムの応えは知っていた。

「いや、良い。幼い頃からクーラー無しで過して来ていると

馴染めなくてな。それにお前が思っているよりは辛くない」
カリムは強がりと言ったが、クーラー無しで育ったことは
事実でそのためにクーラーは好きではなかった。事務所など
ではクーラーを切るわけにはいかないが、自宅ではなるべく
使わないようにしていた。

寝てしまえば熱さを忘れるし、朝起きてシャワーを浴び早
い時間に出社してしまう。

また、確かにこの熱さは辛かったがカリムにはもっと辛い
ことがあった。

「マスード、このような熱さは何とか耐えられる。耐え難い
ほど辛いのは同志を次々と失ったことだ」

マスードは思いも寄らないカリムの言葉に戸惑ったが思
いは一緒だった。

「仰せの通りです。私もとても辛いです。たったこの半年
強の間にこの東部でも統領それにリーダーのナセル様以外
の幹部は皆殺されたり捕まったりしてしまいました」

カリムはいつものようにじっと相手の目を見詰めながら黙って相手の言うことを聞いていた。そうすると相手はいつも心の底まで見据えられたようで落ち着かなくなる。そんな目だった。マスードは続けた。

「しかし彼等のお陰で我々の成果は格段に上がりました。ヤンブー、このアルコバール、それにリヤドと続きました聖戦（ジハード）は世界中に報じられました」

カリムはマスードの話に頷きながら目の前に置かれた香炉にゆっくりと炭を乗せると火を点けた。炭からは煙が上がり直ぐに端が赤々となった。

「ふむ、そうだな」

そうぼつりと言うとカリムは口を尖らせ赤々となった炭に息を吹きかけた。炭はまるで命を得たように一際赤々となった。カリムの顔が一瞬赤く色づいたが吹きおえると直にもとに戻った。

「千人近い同志を失い本当に残念で堪りません。それでも統領のもとにはそれ以上に新たな同志が集まりました。目標実現には心強い限りです」

マスードは矢継ぎ早に喋った。

カリムは静かに炭の上に香木を置いた。すると一筋の青い煙が立ち芳しい香りが辺り一面に漂った。

「ヤティーム、私にはお前の顔が目には浮かぶ」

カリムの目には涙が浮かんでいた。ヤティームはアルコバールの銃乱射・コンパウンド襲撃事件のリーダーだった。幹部会議でもサウジ当局による摘発でトラックが押収されたことに対して自分の責任として陳謝するほどの責任感の強い真面目な人間だった。幹部会議でひたすら詫びていた時のことを昨日のことのように思い出していたのだ。

「ヤティーム様のことは私も忘れることが出来ません。リーダーに相応しい責任感の強い優しい方でした。そんなお方でしたが敵に対しては容赦しませんでした。アルコバールで

は同志とともに十字軍を中心に二八人を射殺することに成功されました。あの聖戦(ジハード)の後は原油価格が急上昇して史上最高値を塗り替えました。素晴らしい成果です」

「そうだったな。それにはラディン様も大満足だった。常々原油価格は安過ぎると仰っていたから一入だ。その意味では一つの目標は達成出来たと言って良いだろう」

カリムは香木から立ち上がる煙を手繰り寄せると目をつぶってその香りを楽しんだ。そして、頭に纏っている白いゴトラの端を広げその煙を沁み込ませた。

「他の目標の中ではロイヤルファミリーの排除が最も難しい目標だと思いますが私は必ず達成出来るものと思っております。例え我々がそれを達成出来なくとも何時の日か誰かがそれを達成してくれることでしょう」

芳しい香りを楽しみながらマスードは言った。

「マスード、必ず我等で達成しようではないか。ロイヤルファミリーには我が部族と親しい人もいるが止むを得ない。それはラディン様も同じだ。ファイサル元国王のご子息とも近

しいが内相とは米軍の駐留について意見が合わずにそれがロイヤルファミリー排除の直接的な理由となってしまった。その後、米軍はカタールに移動したが本質的な体質は変わらないと判断されている」

カリムは兄スルタンがロイヤルファミリーと親しくしていることを良く知っていた。そのロイヤルファミリーを排除する立場となった自分の運命の皮肉を痛感していた。しかし心を鬼にしなければならぬ。ただ、リヤド支部が主導したとは言え自分を可愛がってくれたポールの首を斬らなければならなくなった時は辛かった。また、スルタンが懸命にポールを救おうと動いていたのは知っていたがそれを助けるわけにはいかなかった。それどころか場合によってはスルタンと対決しなければならぬかも知れなかったのだ。

カリムは組織内では「月の欠片」と呼ばれていて外部でもその名を統領として知るものもいたが、組織内外でその「月の欠片」が誰であるかを知るものは殆どいない。

その時、玄関のチャイムが鳴った。

「統領、ちょっと早めですが、きつとナセル様ですよ。あのお方はいつも約束の時間より早めに参ります。私がお迎えに上がりますが、いかがなさいますか。もうお通しして宜しいでしょうか」

マスードは聞いた。

カリムは軽く涙を拭くと直ぐにいつもの通りの表情に戻りマスードに応えた。

「うむ。そうしてくれ」

ナセルは部屋に入ると、まずカリムと抱き合いアラブ式の挨拶をした。

「統領は、またクーラーを入れておりませんか。私は太めですからとてもこのような熱さには耐えられませんな。クーラーを入れて宜しいですか」

挨拶が終るといきなりそう言った。カリムは皆が来るまでにはクーラーを入れるつもりだったので、マスードに命じて直ぐにクーラーの電源を入れさせた。旧式の古いタイプでアメリカ製のクーラーだったのでまるで滝の中にもいるよ

うな大きな音を立ててクーラーが動き始めた。

「アメリカ製のクーラーは、大きな部屋を冷やすには向いていますが音が大きくていけませんな。我が家のクーラーは日本製ですから音が殆どしません」

太めで汗っかきのナセルは額に大粒の汗を吹き出しながらアメリカ製のクーラーに八つ当たりをしていた。

「ナセル、済まん。来る時間が判っていれば少し早めに電源を入れておけたのだが・・・」

と言っではみたが、あまり汗をかかないカリムには熱がりのナセルの気持ちさが十分に判っていたわけではなかった。

「いえいえ、申し訳ありません。統領を責めるつもりは全くありませんでした。人一倍汗っかきなものですからついせいでしまいました。お許し願います」

部屋は瞬く間に冷えてきた。煩いだけに性能は良かった。

「ところで、統領、今日はいよいよ我等の究極の目標について議論を致しましょう。我々には数多くの犠牲者が出ましたがこれまで十分な成果を挙げて参りました。それを踏まえま

して次のステップとして何が考えられるのかじっくりと話し合いたいものです。サウジ政府も原油価格が上昇して十分な石油収入が入りました。放っておけば、いずれ、強大な治安体制が確立してしまうことでしょう。間髪を入れずに生命線を叩く必要があります」

「そうだな。ロイヤルファミリーの崩壊につながるような攻撃とは何か。皆で知恵を出し合おう」

カリムはそう言いつつ、いずれ自分のいる世界最大の石油会社であるアラムコを攻撃することになるに違いないと思っていた。

リヤドはアルコールと異なり湿気が殆どない。夜になるとずっと過しやすくなる。

スルタンはアルコールにいるカリムに一段落したらリヤドを訪れるよう勧めていた。リヤド・アルコール間は約四五〇キロメートルで飛行機なら小一時間ほどだし、幹線道路が整備されているので自動車でもサウジ人の運転なら四時間強で着いてしまう。

スルタンはカリムがアルカイダ・サウジ支部の統領になっていることを全く知らないで、カリムにはテロリストに襲われないよう気をつけるよう注意していた。

スルタンは沙漠のサソリ・リヤド支部のリーダーを知っていたが彼からは統領の名前は「月の欠片」としか聞いていなかった。その彼もポールの斬首事件後にサウジ政府により殺害されてしまった。ただ、スルタンのような有力な地方豪族は一定の距離を置きつつ様々な勢力と接触を保つ必要があった。沙漠のサソリともそれなりの繋がりがあった。

ロイヤルファミリーにしたところで、ビンラディンと決別する前は深い繋がりがあった。特にアフガンで旧ソ連と対峙した時には米国も加わり蜜月状態だった。

ファイサル元国王の子息、ビンラディン、それにグル将軍が強靱な連携を保っていたことは周知の事実だった。

ビンラディンはジェッタのアブドルアジズ大王大学で神学を学んだ筋金入りの強固な思想的背景を持つ。厳格なイスラムを堅持するサウジ王政とは思想的には極めて近いと言える。旧ソ連と対峙した時には資金源としての繋がり以上に

強固な繋がりがあったのだ。

ビンラディンはその後ムスリム同胞団などの過激派と関係を持ち、少しずつサウジ王政とは距離が出来、反米思想が嵩じると王政の方から遠ざからずを得なくなるのだが、それでもアルカイダとは同時多発テロの際に米国側から訴えられるような灰色の関係が続いた。

サウジ王政がイスラム原理主義と思想的に近いというのは飽くまで偶然のことであり、サウジ王政が過激なイスラム原理主義を支持しているわけではない。しかし、これまでも国際的には様々な誤解を生んできた。

それは一九九八年にパキスタン、UAEとともにアフガンのタリバン政権をいち早く承認した時もそうだった。確かにタリバンの政治は厳格なイスラムに基づいていてサウジ王政が支持したくなるのは当然の方向だった。しかし、理想と現実の乖離は大きかった。あまりに徹底した女性排斥ともとれる厳格な教育制度などは庶民の弾圧と取られても仕方のないものだったし、なによりも麻薬取引を巡る疑問はタリバンの国際的な評判を下げるものだった。

結局は、米同時多発テロを契機としてサウジはタリバンの承認を取り消すことになる。

そんなことからすれば、スルタンのような豪族とロイヤルファミリーを含む様々な政治勢力との繋がりももっと儉しいものだ。それにサウジ国民の反米的姿勢は一般的であり、道義的にも過激派との接触を断つ意味合いは薄かった。

石油省次官のアブドルラフマンとスルタンとは旧知の仲だった。スルタンはカリムを呼び寄せた時には是非会わせたかと思っていた。

「殿下、今度アラムコに入社した弟のカリムをリヤドに呼び寄せますので是非お目通り願いたいと思います」

スルタンはアブドルラフマンに言った。

「ほう、シエイクの弟さんはアラムコに入ったか。それだけで彼がいかに優秀か判るといふものだ。わしも一応アラムコの役員に名を連ねているので尽力しよう。早速ジュマ社長にも目をかけるよう言っておくよ」

アブドルラフマンはさざりと言った。アブドルラフマンは面倒見の良いことで評判だ。石油省内の経験も長くなった。スルタンは彼が将来石油相になるのではないかと思っていた。今も何も頼んではないのに社長にまで話を通してくれると言う。

「有難うございます。ただ、そのお話はカリムには伝えないようにします。彼は人に頼るのを極端に嫌いますので・・・大変自尊心の強い男なのです」

スルタンは正直に言った。

「そうか、判った。当たり前だがそれもシェイクの家系らしい。そう言うシェイクも滅多に自分のことでは私に頼みにこない。この間もあの石油省で会ったシンタロウとかいう日本人のためにアリ石油相を紹介するよう頼まれたが、それもこれも全て人のためだ。逆に、沙漠のサソリに接触して隠れ家の情報をくれたり私が世話になるばかりだ。いつも有り難く思っている」

アブドルラフマンは本当にそう思っていた。スルタンの力をいつも借りていた。

「今度も面倒な願いで済まん。今はあのハイル家中枢のアブドルアジズが躍起となっているが、なかなか思うようにはいっていない。世間では次の国王はジャマル家のサード皇太子と言っではいるが適格かどうかには疑問が残る。それに、元気とは言え既に八〇歳を超えている。我がハイル家としてはサウド国王を継ぐものはやはりハイル家と思っている。是非、ハイル家が良いのだと各方面を説得して欲しい」

アブドルラフマンはスルタンがジャマル家からもそのような依頼を受けているの知らずに頼んだ。サウド国王の入院の裏では、そのような権力闘争が行なわれていたのだ。

「畏まりました。及ばずながらご協力させて頂きます」

スルタンは既に気持ちしがジャマル家に傾いていたが、そのような素振りは一切見せずに笑顔で答えた。

「済まん。それから、これはこれに比べれば順位は下だが、あの沙漠のサソリ壊滅作戦だ。これにもシェイクの力が是非とも必要だ。シェイクは沙漠のサソリからも一目おかれ、強い繋がりがあるように聞いているが、彼等がテロリストであることを十分に承知の上のことと思っている。特にこの

ところの彼等の攻撃には目に余るものがある。攻撃対象は十字軍だけではない。彼等は我等の打倒を目指しているのだ。今の内に押さえ込まないと大変なことになるだろう。シェイクはそんなことは言うまでもなく承知のことと思う。是非お願いしたい」

スルタンは沙漠のサソリの件ではアブドルラフマンの依頼を素直に受けようと思っていた。アルミナのような悲劇的な結末になるものがこれ以上出ることを望んではいなかったのだ。

「判りました。積極的に協力させてもらいたいと思います」
アブドルラフマンは続いてスルタンに対して具体的な依頼をした。

「シェイク、あるいは聞いているかもしれないが、あの沙漠のサソリの最高指導者はマハディ“月の欠片”というらしい。リーダーは指名手配者リストに載っているあのナセルだが、月の欠片は謎の人物だ。実在するのかどうかすら判らない」
アブドルラフマンはスルタンの顔をじっと見詰めながらそう言った。

「そうですね。月の欠片ですか。名前だけは聞いたことがあります。これまでの彼等の引き起こしたテロ事件を見ますと相当に頭の良い人物のようですね」

「うん。彼の知識は相当なものだ。科学から政治まで深く広い。味方につければ百人力だが、敵に回すと恐い。それで、シェイクにはその広いネットワークといつもの推理・知力で彼が誰だか突き止めて欲しいのだ。謝礼ははずむ」

スルタンはアブドルラフマンが懸命に頼むのを聞いていた。サウド家は王位継承と沙漠のサソリという大きな難題を同時に抱え、ロイヤルファミリーの中心人物はその解決に躍りとなっていた。

「殿下、謝礼は不要です。こう見えても何不自由なく過しています。ただ、我が部族にご高配願えればそれで十分です」
スルタンは飽くまで、人のため部族のためそして弟のためだった。

その頃、アルコバルでは沙漠のサソリの幹部会議が始ま

ろうとしていた。

「それでは、統領、そろそろ会議を始めたいと思いますので、最初にご挨拶をお願い出来ますか」

いつものことだが、司会進行はリーダーのナセルの仕事だった。ナセルの言葉を受けてカリムは静かに立ち上がった。いつの間にか統領らしい荘厳さが身につき、出席者の視線を一堂に集めていた。カリムは一人一人出席者の顔を確かめると徐に話し始めた。

「今日はよく集まって来てくれた。このように全員が無事であつたのもアラーのお陰だ。まず最初に全員でアラーにお礼をしよう」

カリムはそう言うと両手を上に差し上げ黙祷をした。皆、自然にそれに従った。会場には敬虔な祈りの雰囲気がいっぱいあつた。カリムは続けた。

「神のご加護がなければ、我々は十分な成果を挙げられなかつたことだろう。これからも我々のジハード(聖戦)には必ずや神のご加護がある。常にそれを忘れずに計画を練り行動する必要がある」

「ここでも、息をつぎ、じっくりと一人一人の顔を確認めた。幹部と言っても彼等はいなくなってしまった旧幹部の代わりとして新たに昇格したものばかりだ。カリムの視線を受けると皆緊張していた。」

「こうして皆の顔を見てみると、そこにいたヤティームなどの幹部の顔が一人一人と目に浮かんでくる。彼等もきつと我々の行動を暖かく見守ってくれている筈だ」

カリムの言葉は新幹部の頭の中にまるで真綿に水が沁み込むように吸収されていった。新幹部達は互いの顔を見詰め合っていた。

「これから、ナセルの導きで皆に我等のこれからの計画を策定してもらおう。殺害、もしくは拘束されてしまった旧幹部達の偉業を参考にしつつ、皆の知恵、それからアラールのお導きを得て強い連携の下議論を進めて行くこうではないか。私はそれがきつと我等の目標を確実に達成出来るものであるに違いないと思っている。宜しく頼む」

そう言うとカリムはアザーンの一節を唱えた。皆も一斉にそれに唱和した。

「統領、有難うございました。それでは、これから我等の次の作戦について皆で議論をしてみたいと思うが、その前に一っだけ確認して置きたいことがある」

ナセルはそこで少し間をおいて皆を見回した。いつもの通りのその鋭い目は皆を威圧していた。見られたものは皆すくんだ。

「他でもない、国王のことだ。国王が入院してから一ヶ月近くなる。最初は健康状態についてニュースがあつたが今は何の情報もない。私の把握している情報では入院時には危篤状態だつたというからおかしいと思つている。八三歳の老人が危篤状態で入院して何でもないとすることは考え難い。しかもそんな状態が長く続くのは妙だ。宮殿には快適な場所が確保されているのにそこに戻れないというのはいかにもおかしい。この件で何か情報を得たものはいるか」

ナセルは再び皆の顔を見渡したが、発言するものはいなかった。

「そうか、まあ、この件についてはトップシークレットだろうから情報を入手するのは難しいだろう・・・」

とそこまで言ったところで幹部の一人から発言があった。「国王の容態についての特別な情報というわけではありませんが、私は、あのハイル家の中枢、アブドルアジズがロンドンからひっそりとリヤドに戻って盛んに次期国王をハイル家から出すべきだと長老達を説得に回っているという情報を入手しました。具体的には、サード皇太子は既に高齢でありこの際、激務をお願いするべきではないと主張しているそうです。ということは次の継承順位と想定されているハイル家のトルキ第二副首相、つまり自分の父親を推挙しているのに他なりません。また、一挙に第三世代への若返りを図ることも提案しているようです。誰とは言ってはいませんが、第三世代となれば彼が最右翼であることには間違いありませんから全て手前味噌のようなものです。その際には父親が国王であればやりやすいことでしょう。第三世代の最右翼と言われていたサウド外相もファイサル国王が存命だったとしてもかく今は病勝ちですし、それに若い若いと言われている内に今や六五歳と年もとりました。比べればアブドルアジズはまだ五〇代ですし、それに何よりも元気です」

その幹部はそう言つと発言を終え、席に座った。

「うむ、私もその話は聞いている。私はあのハイル家を特に好かん。要職に着くものが多いのを良いことにやりたい放題だ。まだジャマル家のサード皇太子の方がましだ。沙漠のサソリとしてはいずれも排除しなければならぬが、我等の中には、あのサード皇太子のベドウィンのような感覚に好感を持つものが多い。サード皇太子が国王を継承すれば、つい力が抜けてしまうのではないかと気掛かりなくらいだ。確かめておきたいのはその点だ。我等は、例え、サード皇太子が国王になったとしても攻撃の手を緩めないということだ」

一瞬、皆の顔には怯(ひる)みが見えた。ナセルの指摘は凶星だった。中にはサード皇太子には歯向かいたくないものもいたのだ。しかしナセルの鋭い眼光でその気持ちは萎えた。

「それを踏まえて計画を練ろう。誰か良いアイデアはあるか」

ナセルはそう言いながら、サウジ経済の中核である石油施設を破壊する計画を腹案として持っていた。ロイヤルファミリーに致命的な損傷を与えるにはそれしかない。困難なこと

は判っているが、統領はその中枢を占めるサウジアラムコにいる。内部からの誘導を得てことを運べばあるいは無理なくともないかもしれない。

幹部の一人が立ち上がって意見を述べ始めた。

「ナセル様、私はロイヤルファミリーは勿論のこと十字軍の支配する西欧に大打撃を与える計画を提案したいと思えます……」

リヤドでは「月の欠片」の話題でもちきりだった。

慎太郎、植木、そしてイブラヒムの三人も石油談義に集まったが、まず、その話題だった。

「沙漠のサソリの統領は“月の欠片”という噂が市内を流れています。これまでサウジ政府は、最重要指名手配者リスト、新指名手配者リストを発表してきましたが、その中のリーダーはナセルとなっています。その上にこんな黒幕の人物がいたんですね」

植木がそう言うと、慎太郎は黒幕という言葉が妙に引掛

かった。オスマがスルタンのことを黒幕のような人物と言った。「月の欠片」はスルタン……

「確かに、そんな人物のいたことに驚かされます。まあ、沙漠のサソリは膨大な裾野を持っているようですからいてもおかしくはないんですが……とにかくその数は一万人を超えるとも言われています。まだまだ判らないことが多いんでしょうね。サウジ政府が治安確保で躍起になっていますが、なかなか一掃というわけにはいかないのも判ります。何でもその“月の欠片”は大変頭が良いらしいです。それはこれまでのテロを見ても判ります。完璧なセキュリティと思われるところをやすやすと突破して来てしまうのですから……それに、武器をどこから入手しているかは判りませんが、あの治安部隊、国家警備隊などとはほぼ互角に戦うんですから、その人材、資金収集能力も相当なものです。一体どんな人物なんでしょうかね」

そう言ってイブラヒムが慎太郎の方を向いたので慎太郎は「黒幕、スルタン」の連鎖から目が覚めた。

「そうですね。僕もこここのところその“月の欠片”という統

領のことを耳にします。会社でも時々話題になるようになり
ました。皆恐れていますよ。ベールに包まれていると特に心
配なものです。林公使は各国大使館の間でもその話題でもち
きりで外交官の集まりでも大きな話題になっていると言っ
ていました。米国大使館も情報収集に懸命になっているとの
ことです。勿論サウジ政府は懸命になっているでしょうし、
ロイヤルファミリーも気が気ではないでしょう。皆、彼等が
次に何を狙っているのかを一生懸命になって議論している
ようです」

昨年末のジェットダ総領事館突入事件以来、沙漠のサソリに
よる大きなテロ事件は発生してはいなかったが、この「月の
欠片」の噂でサウジは不安に陥っていた。

「ロイヤルファミリーを排除することが彼等の究極の目標
ですからロイヤルファミリーの人間は皆心配でしょうね。こ
このところ大きな事件がないだけに余計不安になりますね。
彼等が一体次に何を企んでいるのか。今度こそより大きな計
画を実行に移すのではないか。きっとそれを慎重に長い時間
かけて練っていたに違いない・・・」

「イブラヒムさん、そう脅かさないで下さいよ。日本では家族、それに七匹の猫が私の帰りを待っているのですから」

植木は真顔でそう言った。慎太郎もそれは同じだった。逆瀬川の家では両親が彼の帰りを心待ちしている。

カリムの家では東部地区の幹部の一人が、大打撃を与える計画」について説明を続けていた。

「統領、今申し上げた私の計画は、統領のいらっしやるこの東部地区の我々こそが沙漠のサソリの中心であることを明らかにするものでもあります。既に死んでいるかも知れない、否実質的には既に死んでいる国王、あるいはあの第二副首相・トルキを殺害してもロイヤルファミリーを排除出来ないことはファイサル第三代国王の暗殺からも明らかです。ロイヤルファミリーの数は多く閣僚など主要な人物だけでも二〇人を超えます。また、主要州知事も皆ロイヤルファミリーで占めています。彼等全てを殺害するのは至難の業です。従って、東部地区の石油施設に壊滅的打撃を与えて間接的に彼

等の存在基盤を破壊するのが最も効率的なのです」

ムハンマドというその幹部はそう言って説明を終えた。

「うむ、ムハンマドの言うことは良く判る。その通りだろう。

しかし、それだけにサウジ政府も石油施設には数万人とも言われる治安要員を配備していると言う。セキュリティが最も高いところだ。それをどのようにして掻い潜って大打撃を与えるかだ」

ナセルは、自分の考えていたことを言ってくれたムハンマドに感謝していた。しかし、いずれ議論はその方向に行くに決まっている、そう思ってもいた。

「統領はアラムコの幹部候補生ですが、まだ、ご入社から半年程度ですから、まずアラムコ勤務の長いラシードに意見を聞いてみたいと思います。どうだね、ラシード」

ラシードという男は立ち上がって意見を述べ始めた。

「アラムコのセキュリティは完璧です。事故に対してもそうですが、備えは万全で何が起こっても装置が止まらないようになっています。複数のバックアップ体制が完備していますから壊滅的打撃を与えるのは技術的にもかなり困難です」

ナセルは頷きながら喋った。

「そうだろうな。何しろ世界最大の石油会社だし、その石油生産量は世界の生産量の一〇分の一程度を占めるのだから、全面停止となれば世界の石油供給に測り知れない打撃を与えることになる。今一〇分の一と言ったが、これは生産に占める割合だから輸出となるともっとその比率は高まる。必ずや世界を混乱に陥れることになるだろう。攻撃が成功すれば歴史に残る偉業となる。何か良いアイデアはないか」

ラシードは内情を良く知っているだけに口を噤んだ。

それを見てカリムが話し始めた。

「ナセルが言ったように、私はまだ石油施設の詳細を知っているわけではないが、何にでも盲点はあるものだ。また、船を使った海上からの攻撃、飛行機、ヘリなどを使った空中からの攻撃も含め全ての方向からの攻撃を想定して万全のセキュリティを誇っていても意外に正攻法には弱いのかも知れない。堂々と門を突破するのが最もスムーズで最良かも知れない。後は、どこを狙うかだ。私が勉強したところでは、

製油所は最新鋭の制御システムで動いており、指揮命令系統

は集中しているらしい。その心臓部を狙うのがてっとり早いのではないか。それから、石油タンクを炎上させるのも良いがあれはなかなか堅固でちょっとやそつとでは破壊出来ない。また炎上させたところで延焼というわけにはゆかない。効率は悪いだろう。それに比べれば、パイプラインを破壊する方が有効だろう。ただ、意外に補修が容易なことはイラクの例からも明らかなので、パイプラインの心臓部、ポンプステーションを狙うのが最も効率が良いだろう。パイプライン網は複雑だが集中しているところはある。特に紅海岸のヤンブーへと分岐する直前のところを狙えば最も効率が良いし出荷を完全に停止することが出来る。東部油田地帯とヤンブーとを結ぶ東西パイプラインは戦略パイプラインで地下三メートルに設置されているので攻撃は容易ではないし、そのような枝葉を狙っても仕方が無い」

ナセルは目を大きく見開きカリムの話聞いていた。ナセルはカリムがそこまで知っているとは思ってもいなかった。ナセルの額からは汗が噴出した。

「統領、申し訳ありませんでした。ご入社から半年程度など

と申し上げまして・・・」

カリムは笑いながら応えた。

「いや、良い。当然のことだ。むしろ、私に気を使ってくれたものと感謝している」

ナセルの額にはまた汗が吹き出た。

「統領、それでは、仰った線に沿って、ラシードとともに具体的に地点を特定して攻撃計画を策定してみます。何時ごろを攻撃目標に致しましょうか」

カリムは既に腹案を持っていたので即答した。

「来年の二月下旬だ。決して焦ってはならない。じっくりと綿密に計画を練って決して失敗しないようにしたい。相手がアラムコだから私も攻撃に参加する」

ナセルはカリムの意気込みを感じていた。ひよっとしたら、カリムはこの計画に命を掛けているのかも知れないと思っただくらいだ。

「判りました。来年の二月までにはまだ七カ月以上あります。統領が攻撃に参加頂けるといっものは大変有難いことです。しかしながら、大事なお体ですから直接攻撃にご参加頂く分け

には参りません。検問突破にのみ、ご協力頂ければ幸いです。統領が居て下されば、きっと彼等は油断するに違いありません」

カリムはナセルがそう言うのを聞いていたが、アラムコの石油施設攻撃というのはそんなことで済む話にはならないことを充分に承知していた。

長い時間を掛けて寸分狂わずに計画を実行に移すつもりだが、カリムはナセルの感じた通り命を掛ける覚悟だった。そうでなければ、あのタイトなセキュリティを破ることなど出来はしない。

会合を終えて表に出ると、夜空には上弦の月がくつきりと見えた。カリムはそれをじっと見詰めながら呟いた。

「月の欠片」か・・・誰が付けたか良い名前だ。私はこの攻撃の成功に命を掛ける。アラールのご加護を・・・

カリムは、月に向かって両手を挙げてそう祈った。